In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	東アジアの批判・オルタナティブ地理学の形成過程を振り返って
Author	崔, 炳斗
Citation	都市と社会. 6 巻, p.11-20.
Issue Date	2022-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	特集 1： 水内俊雄教授退職記念論文 / 原文韓国語、翻訳：全ウンフィ(大阪市立大学都市文化研究センター研究員)
DOI	10.24544/ocu.20230119-014

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

都市と社会 第６号，2022，pp.11～20

〔特集１：水内俊雄教授退職記念論文〕

東アジアの批判・オルタナティブ地理学の形成過程を振り返って

崔炳斗（大邱大学校名誉教授・韓国都市研究所理事長）

1．水内さんの退職を祝して

大学教員が一生、自分の全力を尽くして研究し、講義してきた教壇を離れるのは、一方では身軽で、一方では物寂しい気分となる。過ぎ去った日々を振り返ると、時間が本当に早く過ぎたことを実感する。しかし、これまで学問的に、実践的に何を成し遂げたかを数えると、どれだけ多くの業績を積み上げたとしても、私たちは常に物足りなさを感じる。おそらくそのために、孔子以来、トップレベルの学者の一人である朱子（朱熹）は、このような詩を残したのだろう。

少年易老學難成　少年老いやすく学なりがたし
一寸光陰不可輕　一寸の光陰軽んずべからず
未覺池塘春草夢　未だ覚めず池塘春草の夢
階前梧葉已秋聲　階前の梧葉已に秋声

私は、この詩を読み返し、水内俊雄（Toshio Mizuuchi）さんの定年退職を心より祝うと共に、これからももっと自由な省察と熱い研究が持続することを、これまで培ってきた業績がさらに輝くことを、願う。

私は約20年前、水内さんにお会いし、東アジアの批判・オルタナティブ地理学のために取り組んだ経験を共有している。個人の人生にとって、約20年は決して短い時間ではない。もちろん、隣人や勤務校の同僚などの日常的関係のように緊密ではなく、顔を合わせられるのは1～2年に1回程度に過ぎなかったが、地理学という共通する学問分野において批判的視点から類似したテーマに関心を持つ研究者同士が出会って、現在まで交流し続けているというのは、紛れもなく特別な関係と言える。特に、水内さんとの共同の経験に関する記録は、東アジアの批判・オルタナティブ地理学の土台形成と、国をまたがる学問的・実践的交流の形成過程の記述として意義を持つ。

2．きっかけとしての世界批判地理学創立大会

私は、1996年8月から1997年7月末まで、サバティカルを受け世界的に著名なデービッド・ハーヴェイ（David Harvey）さんの所属するアメリカのジョンズホプキンス大学地理学科に客員研究員として在籍し、家族と共に生活していた。それ以前、私はハーヴェイさんの著書、『都市と社会的不平等（Social Justice and the City）』（日本語版1980年）と『空間編成の経済理論―資本の限界（The Limits to Capital）』（日本語版1989年）を韓国語で翻訳出版していた。1995年、彼が韓国を訪れた時に直接会って、彼の大学でのサバティカルを希望すると話し、快く受け入れていただいた。当時のジョンズホプキンス大学地理学科は、環境工学と統合され工学部に属し、純粋に地理学を専門とする教員は3人に過ぎなかった。学部課程はなく、大学院生も多くはなかった。

そこでは、ハーヴェイさんに頻繁に会ったり、学術的な会話をしたりする機会が多くはなかったが、彼の講義「資本論入門（Reading Capital）」他、セミナーやディスカッションなどに参加することができた。特に、ハーヴェイさんの弟子で、博士課程の院生だったリサ・キム・デイビス（Lisa Kim Davis）さんとの出会いがあった。彼女はお母さんが韓国人で、それもあって私が学科の雰囲気に慣れるように配慮してくれ、私の家族とも仲良くしていた。彼女は、1996年末頃、国際批判地理学創立学術大会（Inaugural International Conference on Critical Geography、以下、IICCG）が翌年8月にカナダのバンクーバーで開催されるというニール・スミスのメール案内を私

に転送してくれた。韓国を含む東アジア各国の批判地理学者にそれを広く告知し、参加を呼びかけてほしいということだった。

IICGG はバンクーバーにあるサイモンフレーザー大学とブリティッシュコロンビア大学の教員と大学院生が発足のための実務作業をしていたが、ハーヴェイの弟子で『不均等発展 (Uneven Development)』の著者として知られるニール・スミス (Neil Smith) さんが事務局を積極的に支えていた。私は、まず、韓国の同僚や後輩（主に博士課程の院生）に IICGG に関する情報を発信し、この大会での多くの発表ないしは参加を求めるメールを送った。当時、韓国では地理学、都市社会学、都市計画学、地域開発学、都市工学などの専門分野で学ぶ、比較的若手の研究者で構成される「韓国空間環境学会（KASER: Korean Association of Space & Environment Research)」が発足されており、学会員のうち約 10 人が参加するという前向きな反応をみせていた。さらに、私はこの学会の関係者やアメリカ、イギリス、日本などにいる知人の韓国人留学生にも関連情報を知らせて参加を呼びかけるた。同時に、コンタクトのための情報として、それぞれの国から参加してもらえる、あるいは影響力を持つ批判地理学者の紹介を頼んだ。

当時、IICGG に関する日本現地での連絡係は、マーティン・ブレナン（Martin Brennan）さんの担当だったが、彼とは面識がなく、メールをしてみたものの、返事が戻ってこなかった。ちょうどソウル大学地理学科の後輩であり、東北大学大学院地理学研究科で博士課程中にあった金科哲 (現岡山大学教授) にメールをし、事情を説明して日本の批判地理学者の紹介を求めるメールを送った。彼は私に当時島根大学の堤研二さん (現大阪大学教授) と一橋大学の水岡不二雄 (現同大学名誉教授) さんを推薦し、その関心分野と具体的な研究テーマなどを教えてくれた。

手元の資料によると、正確に 1997 年 2 月 19 日、堤さんに初めてメールをし、批判地理学に対する関心と IICGG の参加希望に関して尋ねた。特に、堤さんには、私が構想していた特別セッション、「不均等なグローバリゼーション過程―東アジア各国の経験と役割（Uneven Processes of Globalization: Experience and Role of East Asian Countries)」への参加および報告を依頼した。彼は日本における過疎化の研究に専念していたにもかかわらず、快諾をくださり、今でも感謝の気持ちを持っている。水岡さんからはすぐ返事をいただけなかったので、主に堤さんと何回もメールを交わしながら、IICGG の進行状況と私のセッションに関して意見を交換した。私は、このセッションに、東アジアの他の国からのもっと多くの批判地理学者の参加を狙っていた。登録締め切りを延長し、複数のチャンネルを通して調べたが、それ以上の参加者は見つからなかった。結局、私が組んだセッションは、堤さん以外の全員が韓国の地理学および関係分野の批判的研究者約 10 人の参加となり、3 つのサブセッションに分けて論文を報告することになった。

1997 年 4 月、私はアメリカのテキサス州フォートワースで開催されたアメリカ地理学会（AAG: American Association of Geographers）の年次大会に参加し、IICGG のキーメンバーであったニール・スミスさんとニコラス・ブロムリー (Nick Blomley) さん、ジョー・ペインター（Joe Painter）さんにお会いした。初対面にもかかわらず、親切に対応していただき、IICGG の準備過程に関する意見交換をし、その過程での逸話などについて話し合った。私は、IICGG に韓国から約 10 人が参加予定であるが、その他の国から参加者がほとんどいないと述べ、それまで把握した日韓の状況を中心に、東アジア国家の地理学および関係分野において批判的視点を持つ研究がかなり困難であると吐露した。特に、東アジア諸各国の研究者にみられる、欧米で進められる批判地理学の形成過程とその背景に対する認識不足と、英米圏の地理学者との議論にまつわる言葉の問題などが壁になると指摘した。彼らとの話し合いの他にも、AAG の大会に参加した東アジア出身の地理学者と IICGG に関して少し話する機会があったが、それ以上の参加者を確保することはできなかった。

1997 年 8 月初旬、私はジョンズホプキンス大学でのサバティカルを終えて韓国に帰る途中、IICGG が開かれるバンクーバーに家族と一緒に向かった。そこで会った韓国からの参加者は、数日前に現地入りして周辺地域のエクスカーションまで済ませ、学会への参加にいくらか盛り上がっていた。オハイオ州

立大学の博士課程に在籍していたパク・ベギュン（PARK Bae-Gyoon、現ソウル大学校地理教育科教授）らも合流した。フォートワースのAAG大会で会った地理学者だけでなく、バンクーバーでの新しい出会いもあった。私は、自分が組んだセッションの参加者を確認する一方、他のセッションで報告する論文も検討せねばならなかった。私のセッションが2日目、1日を通して行われたが、東アジア地域に関する研究、とりわけ韓国的な状況に関する研究に特化していたので、関心を持った傍聴者がほとんどおらず、それによってディスカッションも活発ではなかったと覚えている[1)]。

会場では、日本から着いた堤さんと水岡さんに初めて顔を合わせ、嬉しく挨拶をした。堤さんは、私が組んだ3つ目のサブセッションの報告に加えて司会を担当してくださり、非常にありがたかった。水岡さんとは日本における批判地理学の形成過程と現状の問題について議論し、今後東アジアの国々からのもっと多くの地理学者や関係分野の研究者が参加できるように、取り組まなければならない点に意見を共にした。昼間の公式な報告とディスカッションが終わると、夕食と共に酒を挟んでワイワイと騒ぎながら腹を割って話す場が用意されるものだが、私は家族連れの滞在だったために、そういった非公式の交流の場には十分に参加できなかったことを残念に思う。

バンクーバーで開かれたIICGGでは、世界30カ国からの地理学者や活動家、その他の研究者約300人が集まって、この学術大会の必要性と意義を認め、真摯な議論と仲間意識を持つことができた[2)]。当時、新自由主義的グローバリゼーション過程が世界中に広がり、1997〜1998年の東アジア通貨危機を始め、世界各地で深刻な問題が引き起こされていた最中でのIICGGの開催は、「これだけたくさんのナショナルな政治の種を育て、今日私たちの世界を再構成するグローバルおよびローカルな出来事に対する批判的・地理学的対応に従事する地理学者の国際的集まりが構成できる時期が熟した」からとニール・スミスはIICGG開催に関する報告書で述べている（Desbiens and Smith, 1999）。

3. 東アジアオルタナティブ地理学地域会議の発足

ところで、閉会直前にあったパネルディスカッション・セッションでは16人のICG運営委員が選定され、東アジアでは水岡さんと私が含まれた。そして、その場で、第2回国際批判地理学大会の開催候補地として韓国が提案された。私はそれを断れず、思わず無鉄砲に受諾してしまった。韓国が第2回大会の開催候補地と提案された公式な理由は、2000年8月、国際地理学連合（IGU）の第29回世界地理学大会（International Geographical Congress、以下、IGC）がソウルでの開催を予定しており、その直前に第2回ICGGを韓国で開催することで様々な意義が持てると考えられたからである。しかし、問題は、韓国の批判地理学者が韓国でIGUの学術大会を準備する主流の地理学者との暗黙の対立を押し切って、第2回ICCGを開催できる力量があるかに関して、なんの考慮もなかった点であった[3)]。

ニール・スミスは、「日本と北ヨーロッパ各国、韓国、そして近年のイギリスを含む多数の国に、既に組織化された批判地理学の長い伝統がある」と述べているが（Desbiens and Smith, 1999）、少なくとも韓国の状況に関しては、このような記述はけっこう誇張されていた[4)]。上述した通り、当時の韓国では批判地理学的視点を支持する「韓国空間環境学会（KASER）」という組織があり、定期的な学術大会と不定期的なワークショップを開催しながら学術誌『空間と社会』も発刊していた。しかし、学会員のなかで大学教員は5〜6人に過ぎず、そのほとんどが大学院の修士・博士課程の院生であった。この学会を率いていた私自身も、個人としては主流の地理学者から少なからず排除され、しかも地方のなかでも相対的にランクが低いとされる大学の教授だったので、地理学や関係分野から多くの参加者を集め、大会の開催に必要な財政面の確保のための影響力もあまり大きくなかった。

このような事情もあって、私はIICGGの最終日、ニール・スミスさんと水岡さんなどに韓国での第2回ICCGの開催には相当の困難があるので、積極的な支援が必要と話した。特に、水岡さんには日本と韓国の批判地理学者が定期的に学術大会を開き、第2回ICCGの準備へ協力していただけるようにお願いを

し、快諾をいただいた。これを受け、バンクーバーでの学術大会を終えて各自本国に帰り 1 ヵ月ほど経って、水岡さんは韓国の批判地理学者グループと日本地理学会内の「空間と社会」研究委員会（Space and Society Commission）が共催するミニカンファレンスの開催を合意した。彼は 1997 年 9 月 13 日のメールで次のように書いている。

「崔さんが組んだ ICGG（の特別セッション）へのご招待に、重ねて丁寧にお礼を申し上げることができて嬉しいです。それはとても素晴らしい機会で、私はグローバルな次元から社会・空間に関する最新の傾向（state-of-art）をたくさん感受し、学ぶことができました。さらに、私はいろんな共同の研究テーマを共有する世界のたくさんの地理学者に出会えました。私は、このような伝統が今後も持続することを強く願い、そのためには崔さんと私が委員となった運営委員会から積極的な支援も必要でしょう。バンクーバーでの合意の後、私は兵庫県姫路で開かれる共同ミニカンファレンスの場所を次のように用意しました」。

彼が提案したミニカンファレンスの具体的内容は（1）場所：姫路駅から少し離れた国民宿舎志んぐ荘、（2）日時：1997 年 11 月 14 日午後 2 時〜15 日午前 11 時、（3）会議後の日程：姫路城視察ないしは日本人文地理学会学術大会（11 月 15〜16 日）参加、（4）費用：韓国からの参加者の旅費は日本側が負担するなどで、私は喜んで同意した。

水岡さんは日本と韓国から各々5〜6 人、計 10 人ぐらいでの公式な報告とディスカッションを予定しているが、非公式にもたくさんの話ができることを期待しており、特に韓国の参加者には韓国における批判地理学の形成過程と現状に関する報告を依頼した。このような打ち合わせを経てミニカンファレンスが開かれた。日本側からは堤さん、高木さん、そして水岡さんなどの 5〜6 人が参加されたと覚えている（水内さんが参加されたかどうかははっきり覚えていない）。韓国からの地理学者は IICGG にも参加した金德鉉さんと私の 2 人だった。私はここで「韓国の批判・オルタナティブ地理学の形成に関する回顧と展望（Retrospect and Prospect the Development of Critical-alternative Geography in Korea）」というタイトルで報告した[5]。続くディスカッションにおいて、私たちは日韓だけでなく東アジア各国の批判・オルタナティブ地理学者の集まる学術大会の定期開催案に概ね同意し、第 1 回大会の開催場所として韓国が提示された。私たちは、ミニカンファレンスを終え、大阪大学で開かれた日本人文地理学会の学術大会に参加した。

韓国に帰った私は、肩がさらに重くなった気がした。2000 年、第 2 回 ICCG の組織を前に 1999 年に第 1 回東アジアオルタナティブ地理学会議を開催するのは、それ自体で組織の経験となるし、広報の効果も期待できたが、個人としては 2 つの学術大会を連続して準備せねばならならなかったからだ。しかも、1997 年後半から 1998 年は、東アジア通貨危機（いわば IMF 経済危機）により韓国の経済が深刻に低迷し、社会的に混乱な状況であった。多くの労働者が職を失い、国は財政支出を抑えていた。

このような状況で、水岡さんとメールで意見交換をし、とりわけ日韓他の東アジア各国で活動する多数の批判地理学者を推薦していただいた。そこで、学術大会の名称が ICCG の地域会議ということで「東アジア批判地理学大会」と提案されていたのが、水岡さんのご提案で「批判・オルタナティブ」に代わり、結局「批判」という用語も外されて「東アジアオルタナティブ地理学地域会議（East Asian Regional Conference in Alternative Geography）」に決まった。開催日程は 1 年程度の準備期間を設け、東アジア各国の大部分の大学が施行している冬休み期間中の 1999 年 1 月 24〜26 日とした。

そして大会全体のテーマとしては、「グローバリゼーション過程から転換する東／東南アジアの経済—オルタナティブ地理学の視点（East and Southeast Asian Economy in Transition under the Process of Globalization: from the Alternative Geographical Perspective）」などが提案されたが、もっと多くの研究者に参加いただけるように、より包括的なテーマを設定し、「21 世紀の東アジア国家をための社会・空間的イシュー（Socio-spatial Issues for East Asian Countries in the 21C）」にした。参加者のスケール

は東アジアだけでなく、東南アジアを含むことが暗黙的に合意された。それにより、参加が期待される対象者の名簿には中国、香港、台湾、タイ、マレーシア、シンガポールの批判地理学者も含まれた[6]。

このような内容で日本と韓国内だけでなく、東アジア、そしてICCGの会員にも関連情報を発信した。数ヶ月連絡が絶えていたニール・スミスさんも、メールを通して基調講演の提案を快く受け入れてくださった。

こうして第1回東アジアオルタナティブ地理学地域会議が予定通り開催された。初日の場所は慶州にある教育文化会館ホテルで、2日目は大邱郊外にある大邱大学校キャンパスとなった。場所が分かれたのは、大邱大からの若干の財政支援を得るためには学内開催の条件があったからである。ニール・スミスの基調講演のテーマは「世界経済危機と国際批判地理学の必要性（Global Economic Crisis and the Need for an International Critical Geography）」で、大会は6つの一般セッションと1つの特別セッションで構成された。主要テーマは、東アジア地理学の研究方法と視点、東アジア地域問題の再考、都市計画と空間形態の意味変化、都市および地域政策と発展イデオロギー、グローバルの文脈でのローカルな都市発展（大邱の事例）、そしてナショナリズムとローカリティおよび場所の政治などであった。特別セッションは、水岡さん自らの研究課題として、日本における批判地理学の状況と学習教材の準備に関するものであった。

第1回東アジアオルタナティブ地理学地域会議の発表者をみると、計19本の論文や報告書が発表・議論された。なかでも海外からの報告者は、ニール・スミスさん他日本から5人（堤研二さん、藤田哲史さん、水内俊雄さん、水岡不二雄さん、大城直樹さん）、香港から2人（Wing-Shing Tang さん, George C.S. Lin さん）、タイから1人（Chatchai Pongprayoon さん）、そして当時、韓国で研究をしていたオランダ出身のRobert Hassink さんなどであった。韓国人の発表者は私を含めて9人で、実際、そのなかに学部で地理学を勉強したり、地理学科に所属している研究者はたった2人で、他は経済学科、行政学科、都市計画学科、都市工学科所属の教員であった。その他、発表はしていないが、大会に参加した教員や研究者が10人余りいて、大邱大学校キャンパスでの開催日は地理教育科の多くの学生が参観した。シンガポール国立大学地理学科の Lily Kong さん, Kristopher Olds さん, Brenda Yeoh さん, Yeung W.C. Henry さんなどにもメールで参加を呼びかけたが、関心を表明しつつも参加はしていない。

第1回東アジアオルタナティブ地理学地域会議はこうして無事に終わった。約30人の参加者は多数ではなかったが、みんな極めて真摯な態度で論文を発表し、積極的にディスカッションした。公式日程が終わった後も、個人的な交流をしながら楽しい時間を過ごした。第1回大会の資料集をみると、この地域会議の組織化や発展の展望に関する別途の公式セッションはなく、運営委員の選出もまだなかったが、次回を香港で開催することが参加者の間で合意されていたと推定される。特に私は、日本からたくさんの地理学者に参加いただいたことに非常に感謝しており、彼らが慶州から日本に帰る前にご一緒した昼食で、冬の寒さにもかかわらず、汗を流しながら酒一杯を添えて激辛海鮮鍋を食べながら騒いだ時間が今でも生き生きと記憶に残っている。日本の参加者の一部はフェリーから釜山港に入り、同じ海上ルートで日本に戻った。香港から参加したTang さんとLin さんは私が釜山の国際空港に出迎えに行き、私の車で慶州に来られたことを覚えている。日本からご参加いただいたみなさまと香港からご参加いただいたWing-Shing Tang さんに心より感謝し、タイからご参加いただいたが、以降、交流がなかったChatchai Pongprayoon さんにも感謝の気持ちを表したい。

4. 第2回世界批判地理学大会の開催

第1回東アジアオルタナティブ地理学地域会議以降、私は再び第2回世界批判地理学大会の開催準備に入った。そのため、私は1999年4月、メキシコのメキシコシティで開かれた ICCG の運営委員会に出席した。メキシコ国立自治大学のBlanca Ramirez さんなどの多数の研究者とニール・スミスさん、水岡さんなども同席した。この会議では、ICGの主旨文の草案が議論された。運営委員会の他、同大学でのミニカンファレンス開催の試みもあったが、実現はしなか

った。運営委員会に参加するためには、往復で１週間が費やされたが、私には時間的にも財政的にも大きな負担であった。他の運営委員会がホノルルやヴェネツィアで開催されたと記されているが、それらには参加できなかった。その冬（1999 年 12 月 18 日）、水岡さんは勤務校の一橋大学で「1997 年アジア太平洋の経済と 21 世紀の展望（The Asia-Pacific Economy in 1997 and into the 21st Century）」というセミナーを開催し、私も呼ばれて「東アジア危機と社会環境的衝撃（The East Asian Crisis and its Social and Environmental Impacts）」という論文を報告した。私は、大邱開催の第２回 ICCG の準備状況に関して水岡さんと話し合った。

しかし、私個人にとって、第２回 ICCG の準備はかなり厳しかった。上述の通り、韓国の地理学界での批判地理学への認識や私自身の位相による限界もあったが、私は、実践的な社会・政治的運動にも相当の時間を割愛せねばならなかった。私は 2000 年当時、全国民主化教授協議会の共同議長を務め、さらに、大邱地域で市民団体およびそれに関する２つの付設研究所の代表も務めていた。それだけでない。2000 年１月から６月まで、韓国では全国的に、国会議員選挙に関連して不正腐敗などで不適切な候補に対して落薦・落選を求める市民運動が活発に展開され、その市民運動の主体として「2000 年総選連帯」が結成されていた。私はこの連帯の地域組織の「大邱慶北総選挙連帯」の常任共同代表を務め、ほぼ毎日活動家と一緒に会議をし、街頭に出て市民に広報をしなければならなかった。このような状況下で、どのような力に導かれて、第１回 EARCAG に続けて第２回 ICCG を組織できたか、今でも不思議に思う。

第２回 ICCG の組織のために、別途のローカル運営委員会が立ち上がったかどうかに関してもほぼ記憶がないほどに、ほとんどのタスクが私個人の作業を通して進められた。水岡さんにメーリングリスト（icgg-ml@econgeog.misc.hit-u.ac.jp）とホームページを制作いただいて、それ以上のネット上の作業はなかった。韓国空間環境学会の会員も国内参加者への呼びかけをたくさん支えてくれた。しかし、私は数百件に至るメールの問い合わせに対応し、いただいた報告テーマと要旨を整理し、再分類して数十個のセッションを組まなければならなかった。要旨を再編集して資料集も制作した。大会組織の財政は、参加者負担の登録費と共に、公式的に大邱大学校と韓国研究財団からの支援を受けたが、大邱市と韓国観光公社から国際学術大会誘致を支援する少額の後援から充てた。最大の問題の一つは宿泊だった。大邱大学校は郊外に位置し、近くには百人余りが泊まれるそれらしい宿がなかった。仕方なく、夏休みで空いている大邱大学校の学生寮を利用するほかなかった。

こうして大きなトラブルなく、第２回 ICCG が 2000 年８月９日から 13 日の間、大邱大学校キャンパスで開催された。全体のテーマは「21 世紀のオルタナティブ地理学のために（For Alternative 21st Century Geographies）」であった。20 余カ国から約 150 人が参加し、約 80 本の論文を発表、議論した。開会セッションで私は、批判地理学の目的と関連して「ユートピア空間の弁証法（Dialectics of Utopian Space）」というテーマで基調講演をし、メキシコから参加した Blanca Ramirez さんは「世界批判地理学集会の構築のための政治　(Politics of Constructing an International Critical Geography Group) 」というタイトルで基調講演を行った。最終日、最後のセッションでは、デビッド・ハーヴェイさんが「地理的不均等発展と普遍的権利（Uneven Geographical Development and Universal Rights）」というテーマで報告した。

約 30 個のセッションで報告された論文のテーマは、新自由主義的グローバリゼーションと経済危機から、都市計画と国家の役割、環境危機と政治生態学に至るまで非常に多彩で、批判地理学と関連するテーマの映画の上映や詩の朗読会も含まれた。なかでも、ドン・ミッチェル（Don Mitchell）さんの「アメリカの人民地理学プロジェクト（People's Geography Project of the United States）」に関する発表は、（批判的）地理学を一般人にも容易くアクセスできるようにすることを狙いとした。批判地理学で「批判的」(そして「オルタナティブ」「急進的」)とは何を意味するか、この用語が国によって異なる文脈でいかに使われているかも議論のテーマとなった[7]。さらに、新自由主義的グローバリゼーションと関連して引き起こされた諸変化、特に 1997〜99 年

の通貨危機と東アジア各国に与えた影響などが主な関心事であった。

大会の終了後のエクスカーションは、当初はいくつかコースが提示されていたが、最終的に一つにまとまった。大邱市内に位置する米軍基地周辺と、大邱外郭に位置する地方工業団地でのストライキ現場を訪れるコースであった。同行したインドの Swapna Banerjee-Guha さんは、大都市のど真ん中にどうして米軍基地が位置しているかと大きな疑問を呈していた。参加者は日本帝国の植民地経験とその後の米軍の駐屯によって、韓国の主要都市の空間構造がいかに歪曲されているかを自身の目で直接確認できた。大邱近郊の工業団地では、多国籍企業の分工場とその下請工場における労働の現場を歩き回り、当時ストライキに入っていた労働者と簡単なインタビューもした。

韓国の地方都市の大邱で開催された第 2 回 ICCG に、これだけ多くの参加者が集まって大会を開催できたのは、様々な理由がある。それは、世界各地に散在する批判地理学者の情熱と積極的参加にあると言える。実際、大邱の夏の天気は摂氏 35 度を前後するほど蒸し暑い。それにもかかわらず、ほとんどの海外参加者は大邱大学校の学生寮に泊まり、各部屋にシャワーがなく共同施設を利用するという非常に残酷な不便を強いられていた。これに関して、心より申し訳なかったと思っている。しかし、だれもそれに関する不満を提起せず、翌日のセッションに積極的に参加し、報告とディスカッションを続けた。そして毎晩、大学近くの居酒屋に飲み会の場が設けられ、みんなではしゃぎ、談笑を楽しんだ。ニール・スミスさんは、北イングランド民謡を編曲した「社会主義 A.B.C」（The Socialist ABC）という歌で場を盛り上げた。

第 2 回 ICCG が成功的に開催できたもう一つの要因は、東アジア各国、なかでも日本と台湾からの多くの地理学者の参加があったからと思っている。この点においては特に、私は日本と台湾から多くの地理学の教員と大学院生、そして関連分野の研究者にたくさんの参加をいただいたことに対して、改めて感謝の意を表したい。特に、第 1 回 EARCAG には参加しなかったが、第 2 回 ICCG に多くの大学院生と参加してくれた Chu-joe Hsia さんと Jinn-yuh Hsu さんなどに心より感謝する。二人は香港で開催された第 2 回 EARCAG にも積極的に参加し、その後も EARCAG の主要メンバーとして、この大会が現在まで持続する上で重要な役割を果たしている。第 2 回 ICCG に参加した海外の地理学者が引き続きソウルで開催された IGC の学術大会にどれだけ多く参加したかはわからないが、それを理由に第 2 回 ICCG の韓国開催を決めたのは名分に過ぎなかったのかもしれない。大邱で第 1 回 EARCAG と第 2 回 ICCG が成功的に開催され、各々の会議が現在まで発展的に続いてきたのは、世界でも特に東アジア地域において、資本主義の社会経済システムと、その産物としてそれを条件づける空間的編成に対する批判と共に、それを解消するための代替案を模索する必要性を、私たちが共通して痛感しているからであろう。

5. その後の個人的な感想

第 2 回 ICCG がスムーズに開催されてから 1 年ほど経った 2001 年 7 月、私は第 3 回 ICCG の開催に関する話し合いのため、イギリスのオープン大学で開かれた運営委員会に出席するためロンドンを訪れた。連携する学術大会はなく、運営委員会のみだったので、時間的にも、財政的にも相当な負担となった。第 3 回 ICCG は、ハンガリーのベーケーシュチャバで開催され、私は参加のために報告原稿の作成や航空券の予約などを済ませていたが、母親の病気で参加できなかった。以降、ICCG は第 4 回メキシコのメキシコシティ（2005）、第 5 回インドのムンバイ（2007）、第 6 回ドイツのフランクフルト（2011）、第 7 回パレスタインのラマッラ（2015）、第 8 回ギリシャのアテネ（2019）で引き続き開催された。しかし、私は、第 3 回大会以降は参加していない。個人的な事情もあったが、時間的、財政的な問題と共に、非英語圏参加者とのコミュニケーション上の限界などを理由に、ICCG にはこれ以上参加しないことにしたのだ。代わりに、EARCAG にはできるだけ欠かさず出席し、東アジア地域でこの会議の持続的開催に寄与できるように努力することにした。戦略的に選択と集中をするしかなかった。

EARCAG は第 1 回研究集会が大邱で開催されて以来、第 2 回香港（2001 年 12 月）、第 3 回東京／

大阪（2003 年 8 月 5〜9 日）、第 4 回台北（2006 年 6 月 24〜30 日）、第 5 回ソウル（2008 年 12 月 13〜15 日）、第 6 回クアラルンプール（2012 年 2 月 13〜16 日）、第 7 回大阪（2014 年 7 月 22〜26 日）、第 8 回香港（2016 年 12 月 6〜8 日）、第 9 回大邱（2018 年 12 月 10〜12 日）で引き続き開催された。第 10 回大会は 2020 年台北での開催予定だったが、コロナパンデミック(COVID-19 Pandemic)で延期が続いている。私はこれらのなかで、大阪で開催された第7回は両親の介護で出席できなかったが、その他の大会は全て出席し、基調講演や一般セッションの発表、司会などを務めている。それぞれの置かれた困難な状況のなかでも、この国際会議を組織し、成功的に開催できるように尽力してくださった現地事務局に感謝する。EARCAG が継続して開催され、発展できたのは、全て現地スタッフの犠牲的努力のお陰である。

なお、この組織から派生し、もしくは関連する様々な活動を通じてその外縁を広げると共に、実践的な基盤をつくる努力についても感謝する。代表例として、水内さんが所属する大阪市立大学の地理学教室では EARCAG と共にワークショップを開催しており、2019 年 11 月 26〜28 日には「東アジアの開発主義のジオポリティカル・エコノミー（Geopolitical Economy of East Asian Developmentalism）」というテーマで第 4 回ワークショップが開催された。さらに、水内さんが副所長を務める大阪市立大学都市研究プラザの呼びかけで、東アジア各国で批判的研究を行っている公共／民間研究所および活動家団体と連帯し、「東アジア統合的都市ネットワークワークショップ（East Asia Inclusive CTYNet Workshop）」が 2011 年から日本、韓国、台湾、香港など東アジアの諸都市の現場で開催されている[8]。香港バプティスト大学の Wing-Shing Tang さんも EARCAG 関連もしくは、その会員が参加する様々なワークショップを開催している。

EARCAG が 1999 年に発足して 23 年という歳月が過ぎた。EARCAG はすでに定着段階に入り、東アジア人民と社会空間的イシューに関心を持つ研究者の参加を歓迎している[9]。しかし、運営委員会のキーメンバーであり、自国での EARCAG 開催時に献身的な努力を惜しまなかった台湾の Chu-joe Hsia さん、日本の水岡さん、香港の Wing-Shing Tang さん、そして私は既に定年退職をし、この 3 月は、水内さんが定年退職を迎えることとなった。EARCAG の今後の持続的発展のためには、何よりも運営委員会がもっと若くて活気に満ちた、有能な批判地理学者で補充される必要がある。さらに、コロナ禍でほとんどの国際学術大会が開催されていないなか、この問題を克服するための方策を模索することも、批判地理学者の研究課題であろう。もし、現在の状況が続いて、国家間の文化的、特に学術的交流が減退し、ましてや交流の必要性そのものが否定される傾向が生じるならば、私たちは国家主義の穴に陥ってしまうのだろう。

この点に関連して、今は故人となったニール･スミスとのあるエピソードを紹介したい。1999 年 4 月、メキシコシティで開かれた ICCG の運営委員会での出来事だ。私はニール・スミスと他の運営委員たちと一緒に、都心の繁華街にあるカフェのテラス席で談笑を楽しんでいた。スミスは、通行するメキシコ人たちを眺めながら、メキシコの人びとは、自分の肌がもっと白くなることを望んでいると語った。よく知られているように、メキシコ人は先祖の原住民と白人との混血を通じて形成され、地域によって混血の度合いが異なるという。そこで私は彼に尋ねた。一つの民族が他の民族との混血を通じて互いに同じ肌の色を持ち、統合された文化とアイデンティティを持つ方と、各民族が固有の肌の色を持って異なる民族性や生活様式を保つ方とどちらが良いのか。ニール・スミスさんはあまり迷わずに前者の案を選択した。彼は、この問題に関して限り，普遍的なものと特殊なものとの弁証法をきちんと認識できていなかったように見える。植民地民族主義の歴史を強く意識している私としては、意外な答えだった。私はすぐ、問題を単純化しすぎた質問であることに気づいた。

ニール・スミスさんは ICCG の発足だけでなく、EARCAG の発足にも決定的な契機として最高の実践的な役割を果たしたと私は思っている。ハーヴェイさんが追悼文で述べたように、彼は飲みすぎによ

って死に至ったという点では、自分自身については批判しきれなかった批判地理学者という矛盾に陥ったが（Wachsmuth、2013 から再引用。なお、Cowen、Harvey、et.al.、2012 を参照）、確かに彼の早すぎる死は批判地理学界の大きな損失であった。彼の死を悼んだ私と韓国の同僚は彼の業績を称え、彼の力作『不均衡発展』を共同で翻訳・出版し、『空間と社会』の追悼特集号も編集した。私は、彼の批判地理学的な主張に深く共感し、学問的だけでなく実践的にも、批判地理学の形成と展開に多多大な貢献をされたことを否定できない。

とはいえ、先述したエピソードに関して限り、私はすべての文化と知識は相違性と共通性の弁証法的関係が必要であると考えている。この点は、民族性や文化だけでなく、批判地理学的知識においてもそうである。上記のエピソードでのある性向とは違って、ニール・スミスもこの点をよく理解していただろう。彼はそれを、多少異なる文脈でこう示す。「ICG への私たちの野心は、政治的につながり組織しようとする私たちの試みにおいて、スケールの重要性を認めながら、グローバルなものとローカルなものの代替案となる社会弁証法を示すことである」。私は、批判地理学者に必要なのは、各国と民族が、一方では、自らの固有の文化と知識を守って発展しながら当面した問題を民主的に解決できる力量を育て、一方では、他国と民族が共通して直面している問題を認識し、その解決のための相互交流と協力を図る学問的、実践的代替案を探ることである点を強調したい。こうした相違性と共通性の弁証法を現実で実現することは決して簡単ではない。

もう一点、大事な事実は、東アジア各国は地理的に隣接しているという点である。私たちは、物理的空間の隣接性に閉じこもってはならないが、また同時に、その限界を決して脱することができない。いくら関係的な空間が強調されるとしても、物理的な空間は人間の生活と意識の可能性を条件づける。私たちは地理学者である。この地球という空間を生きる全ての人類は地理学者である。それだけではない。私たちの社会空間も決してフラットにはならない。社会的世界が、ダイナミックに不平等であり続けるように、地球空間も絶えず大きく揺らぎながら、あちらこちらの間の不均等をつくり出す。私たちは、この世界と地球が平坦になることを求めるユートピア主義者ではない。私たちは、このような不平等を拒否し、立ち向かってたたかおうとする批判地理学者である。社会空間的不平等が決して克服できない人間の生の可能性の条件であるならば、批判地理学は永遠に、なくなることはあるまい。

（原文韓国語、翻訳：全ウンフィ（大阪市立大学都市文化研究センター研究員））

【注】

1) 私はスウィンドゥ（Swyngedouw）さんが司会を務めたセッションに参加し、マルクスの生態学と環境正義というテーマの論文を報告した。水岡さんは私のセッションに参加しなかったが、どのセッションで発表をされたかは覚えていない。
2) この点に関して、当時堤さんが空間と社会研究グループのニューズレターに掲載した文章を参照（Tsutsumi, 1997）。
3) 第 29 回ソウル世界地理学大会では、韓国の地理学者のほとんどが動員されただけでなく、組織準備委員長は国務総理が務め、世界各国からおよそ 3000 人の地理学者が参加したなか、金大中大統領が祝辞をした。
4) Mizuoka et al.（2005）によると、日本における批判地理学の由来は概ね 1920 年代に遡る。韓国では日本帝国の植民地下において共産主義的民族主義運動があったが、植民地からの解放と分断を経て、南の韓国では地理学のみならずすべての学問分野においてマルクス主義はタブー視された。1980 年代半ばまでマルクスの『資本論』は読んでも所持してもならない禁書であったし、さらに、私が翻訳したハーヴェイの著書『都市と社会的不平等』は印刷・出版はされたものの、5 年間市場での販売が禁じられていた。
5) この原稿は水岡さんが日本語に訳し、空間と社会研究グループのニューズレターに掲載された（崔炳斗, 1998）。
6) それ以降、関連する若干の論争があった。香港で開催された第 2 回 EARCAG にシンガポール国立大学の Yeung W.C. Henry さんに参加いただいたが、彼は参加者ない

しは関心地域のスケールの、「東アジア」からインドを含む南アジア、もしくはアジア全体への拡大を提案した。当時の運営委員会の会議で、私はこの提案にけっこう強く反対した。というのも、その通り拡大した場合、大会の参加者と関心地域のスケールが数的に増え、多様化されることが期待される一方、同時に、関心事の共通性や参加者間の親密性は減少し、さらに、英語を通したコミュニケーション問題が増幅すると判断したからだ。

7）「批判的」地理学は何を意味するかを規定することに対して反対の声もあったが、規定しないことで得られるものより「焦点」を失うという限界も指摘された。関連して、ICCG 創立の主旨文には、4 つの側面において「批判的」であることが明示されている。つまり、「私たちが批判的な理由は、(1) 私たちは蔓延する資本主義的な搾取システムをなくすための社会変化を要求し、そのためたたかうから、(2) 私たちは社会科学がますます企業化される大学に帰属するのではなく、人々に帰属されると信じ、多くの学術的研究において自己規定的な孤立を拒否するから、(3) 私たちは差異を高揚し、しかしそれに基づく社会・経済的展望を制限しない社会をつくろうとするから、そして (4) 私たちは人間の権利を無視する既存のシステムに反対し、学界の外で社会変化を追及する既存の社会運動に参加するからである」。

8）他方、私は個人的な研究課題のために 2008 年 2 月に同僚 1 人と数人の大学院生と一緒に大阪地域のフィールドワークを実施した。トランスナショナル移住者の移住および適応過程と政府政策に関するその調査で、水内さんとその院生の積極的な支援を受け、私たちは大阪市役所を訪問して、担当職員から関連政策に関する説明を受けることができた。さらに、外国人移住者の支援団体を訪問して、活動家との面談を通じて多くの資料を得ることができた。これに関連して、水内さんとその院生に深く感謝を申し上げる。私の研究グループは同年の 3 月、同じ目的で広島にも訪問してフィールドワークを行った。その結果、数本の論文報告とともに『多文化共生―日本の多文化社会への転換と地域社会の役割』(2011) という著書を出版できた。

9）関連して、Wing-Shing Tang さんは 80 本余りの論文が発表された第 8 回香港大会の結果報告書に次のように記している。「1999 年 1 月、韓国の慶州と大邱で発足して以来、EARCAG は概ね 2 年に 1 回、東アジア人民に関心を持って地域のイシューを扱うフォーラムとなった。私たちは相互関連された世界で生きていることを実感することで、EARCAG では常に最近の発展に関する見解を交流しながら論争に参加するために、全世界にまたがっている研究者を歓待したい」。

【参考文献】

崔炳斗著・水岡不二雄訳（1998）「韓国における批判的・オルタナティブ地理学の発展―回顧と展望」日本地理学会『空間と社会ニューズレター』12 号

Cowen, D., Harvey, D., Haraway, D., Rameau, M., Ramirez, B., et al.（2012） “Neil Smith: a Critical Geographer,“ Environment and Planning D: Society and Space, 30, 947-962.

Desbiens, C. and Smith, N.,（1999）“Editorial: The International Critical Geography Group: Forbidden Optimism?,” Environment and Planning D: Society and Space, 17, 379-382.

Mizuoka, F., Mizuuchi, T., Hisatake, T., and Tsutsumi, K.（2005） “The Critical Heritage of Japanese Geography: its Tortured Trajectory for Eight Decades,” Environment and Planning D Society and Space, 23(3), 453-473.

Tang, W.-S.（2016） Report on the 8th East Asian Regional Conference in Alternative Geography, https://hugeog.com/east-asian-regional-conference-in-alternative-geography/

Tsutsumi, K.,（1997） “Report on the IICCG(First International Conference of Critical Geography,” Newsletter of Space and Society（in Japanese）堤研二「IICCG（第 1 回国際クリティカル地理学会）の（多分に私的な）報告」日本地理学会『空間と社会ニューズレター』2 号

Wachsmuth, D.,（2013） “For the possibility of another world: Tributes to Neil Smith(1954-2012): Part Two the contradictions of Neil Smith,” City, 17(2), 409-410.